

2017・5・17

タン…タン。間隔を置いて、乾いた音が闇に響く。午後8時すぎ、八戸市弓道場。周囲の木々のおかげで、中心街近くとは思えないほどの静寂の中、市民や大学生たちが一心に矢を放っていた。

袴姿の男女が決まった所作で弓を引き、28歳先の的に意識を集中する。その姿に、改めて日本の武道の美しさを感じる。取材であり、写真を撮らなければならない。しかしシャッター音が邪魔になるのでは、と撮影をためらった。「大丈夫、その程度で乱れる集中力なら弓を引かせん」と指導者の女性。確かにカメラの連射音が響いても射手は全く動かない。

東奥春秋

打ち込む

学生は、ここで練習している八戸学院大学の弓道部員。今は専用の弓道場を持たないが、この夏には2年ぶりに再建されるといふ。弓道に青春をかける地元の若者が大学進学後も継続できるようと、地域に根差した学府づくりに打ち込む同大が建設を決めた。

同部主将の女子学生は今年25歳になる。高卒で就職、弓道から一度離れたものの「やはり続けたい」と同大に入学、再び弓を持った。学業、アルバイト、部活と忙しいが「弓道場再建で練習時間が増える。うれしい」。弓道に打ち込む決意を固めた彼女の矢は、強い思いを示すようにまっすぐに的を射抜いた。(8)